

世界に愛される日本の植物
キク

キクは、キク科キク属 (*Chrysanthemum*) の植物です。観賞用に栽培されるキク (イエギク、栽培ギク) は中国に由来し、ハイシマカンギクやチョウセンノギクなど複数の野生種が交雑を重ね、人為的な選抜過程を経て成立したと考えられています。日本には、奈良時代の後半から平安時代にかけて、遣唐使などの文化交流に伴ってはじめて渡来しました。その後、中国の宋~明代にかけて改良された品種と栽培技術が鎌倉~室町時代の日本に再度渡来し、江戸時代に普及が進むなかで独自の発展を遂げていきました。

中国のキクが先に欧州に普及

日本のキクがヨーロッパに渡ったのは、1688年にオランダ貿易を介して運ばれたものが最初でしたが、このキクはその後絶えてしまいました。1789年には中国のキクがフランスに伝わり、1820~30年にはイギリス東インド会社の船が中国から約70種類の園芸品種を持ち帰りました。これらをもとにヨーロッパでのキク栽培がはじまり、1843年には最初のキク品評会がイギリス・ノーフォークで開催されました。1846年にフォーチュン (1812-1880) が中国から持ち帰ったキクは、後に改良されポンポン咲きに発展して人気を集めました。

日本のキクとの出会い

1860年秋に訪日したフォーチュンは江戸のキク名所を巡り、「日本の園芸家は、菊作りの技術にかけては、われわれよりも大分うわ手で、不思議に大輪の花を咲かせる。」(フォーチュン著 / 三宅馨訳「幕末日本探訪記 江戸と北京」講談社学術文庫、1997年、P.139より) と感心し、多数の品種を入手してイギリスに送りました。



上図：イギリスの園芸雑誌に載る日本の大菊の紹介記事 (The Gardeners' Chronicle, Nov 9, 1889年) (Biodiversity Heritage Library)



上図：ダニエル・リッジウェイ・ナイト (1839-1924) 画「キク」(1898年頃) (Wikimedia Public domain) フランスの農村での菊栽培の様子を描いています。ナイトはアメリカ出身の画家で1872年からフランスに定住しました。



上図：大菊の図 (1913年アメリカの園芸カタログより) (The glorious set of Dingee Chrysanthemums. Dingee guide to rose culture. The Dingee & Conard Co., 1913.) (Biodiversity Heritage Library)

日本のキクが欧米に普及

フォーチュンが日本で入手したキクはすぐに普及し、19世紀後半には江戸時代に改良が進んだ大輪・中輪の特徴的な花形が欧米各国で見られるようになりました。各地でキク園芸愛好会が設立され、日本から栽培技術や仕立て方、展示手法を取り入れつつ、独自の感性による園芸文化が発展しました。その後欧米独自の育種が進み、鉢用用のポットマムや切り花用のスプレーマムが開発されて、1960~70年代に日本に逆輸入されました。

日本の野生種も育種に貢献

アメリカの育種家ルーサー・バーバンク (1849-1926) は、ヨーロッパに自生するフランスギク (*Leucanthemum vulgare*, *L. maximum*, *L. lacustre*) と日本のハマギク (*Nipponanthemum nipponicum*) を交配させ、1901年に耐寒性常緑の観賞用品種 ジャスタ・デイジーを育成しました。



上図：Alois Lunzer 画「Medusa Chrysanthemum」(1861~97年頃) (Wikimedia Public domain) アメリカで描かれた松阪菊とみられる園芸品種の図。ギリシャ神話に登場する怪物メドゥーサにたとえた英語名がつけられています。



上写真：ジャスタ・デイジー (Wikimedia Public domain)



上写真：オーストラリア・タスマニア島での菊展示例 (The Gardeners' Chronicle, Oct 29, 1892年) (Biodiversity Heritage Library)



上写真：イギリスの園芸雑誌で紹介された日本の菊園芸 (千輪作り) (The Gardeners' Chronicle, Apr 17, 1897年) (Biodiversity Heritage Library)



上写真：1925年にアメリカで開催されたクリサンセマム・ショー (Wikimedia Public domain)